札幌大学総合論叢　第25号（2008年3月）

〈論文〉

「架橋動詞」と「指定主語条件」

葛　西　清　蔵

0. それぞれ別のものとして扱われる「架橋動詞」と「指定主語条件」は意外と近い関係にあり，これらの類例の検討をすることは，言語事実を見るのにあらたな視点を与えてくれることを示そうとするのが本稿の目的である。章だてはつぎのようにする。

1.「架橋動詞」
　1.1 架橋動詞の性質
　1.2「うそテスト」をめぐって
　　1.2.1「うそテスト」
　　1.2.2 架橋動詞の性質の確認
2.「指定主語条件」の性質
3.「架橋動詞」と「指定主語条件」の関連性
4. まとめ

1. 「架橋動詞」

1. 1　架橋動詞の性質

まずつぎの例をみよう。

1. a　Who did you <u>think</u> (that) Mary saw ... ?
　b　What did you <u>say</u> (that) Mary had done ... to Sue ?

ところが，つぎの（2a, b, c）の例は，統語的には（1a, b）と同じでありながら，従属節から，WH 移動ができないことを示している。

2. a　*What did John complain that he had to do this evening ?
　b　*What did John quip that Mary wore ?
　c　?What did he murmur that John saw ?（下線筆者）

Chomsky（1977：85）は，（2a, b, c）の例から，「主節動詞のどのような性質が「架橋」となり，S'island から wh 句の抜き出しを許すのか不明（unclear)」である，といっている。

（2a, b）統語的に同じ現象であるはずの（1a, b）が許容されている。許容されない場合の動詞，complain, quip と，許容される場合の動詞 think, say を比べると，例えば，quip = to say something short and amusing（Longman）とあるように，許容されない例の quip は許容される say よりも動詞の情報量が多い。

3. a　She purred that Fred had given her a present.
　b　??What did she purr that Fred had given her.

WH 移動された（3b）では許容度はきわめて低い。purr = speak in a low soft voice（COD）とあるように，ここでも「非架橋動詞は，... in X manner のように，様態副詞をふくんでいるだけ意味が重層化している」（安藤・小野 1993：33）といえる。

（2a, b）のように，全く許容されないもの，（3b）のように，許容度がかなり低いもの，さらに（2c）のように許容度がやや落ちるもの，また（1a, b）のように許容されるもの，と「段階性」をもつものである，ことが確認される。

1. 2 「うそテスト」をめぐって

上の事実は，WH 移動の現象が主節動詞の「情報量」にかかわるものであること，WH 移動の許容性は「段階的」なものであることを示している。この情報量と統語現象の関係については，はっきり，Erteschik-Shir（1979）の「うそテスト」（lie test）との関わりを思い起こさせる。

1. 2. 1 「うそテスト」

まず，その例を見よう。

4. Bill said: She claimed that he had done it.
   a. which is a lie ... she didn't.
   b which is a lie ... he hadn't.
5. Bill said: She made the claim that he had done it.
   a. which is a lie ... she didn't.
   b ?which is a lie ... he hadn't.
6. Bill said: She discussed the claim that he had done it.
   a. which is a lie ... she didn't.
   b *which is a lie ... he hadn't.（下線筆者）

(4)，(5)，(6) の文に見るように，述語が claim, make the claim, discuss the claim のように，情報が増えるにしたがい，それぞれ (b) の許容度が低くなる。これらの文は非常に興味ぶかい事実を示唆している。つまり，

7 主節動詞が情報がゆたかになるほど，その部分は主張となる。相対的に，その他の部分は前提部分となり，その前提部分から要素を WH として抜き出すことはできない，

ということを示していることになる。まさしく，Deane (1991：21) がいうように 'the choice of verb clearly reflects the acceptability of extraction' であり，'a matrix which is subordinate (i. e ... where the embedded clause is dominant and allows extraction) ...' (Erteschik-Shir, N. 1977: 50' がそのままあてはまる。[1]

1. 2. 2 架橋動詞の性質の確認

これまで見たことは，つぎの例でも確認できる。

8. a　*Who do you deny the claim that John met ... ?

　b　*What did you destroy a picture of ... ?

(8b) の deny the claim は，情報量が多く，主張となっており，相対的に前提部分となる要素を WH 化はできない，と見れよう。deny the claim は，make a claim にくらべて「普通でない」(unusual) で「予期しにくい言いまわし」(less predictable collocation) であり，このことから

9. a　'the unusual the matrix verb, the less easy extraction is' (Ertaschik-Shir and Lappin 1979: 71)

　b　'as the verbs are made less stereotypical, the acceptability of extraction drops off' (Deane 1991: 22)

ということになる，わけである。さらに重要なことは，このことは，(8a) をふくめ今まで見てきたような，「主節」，「従属節」からなる複文ではなく，(8b) のような「単文」においても見られるということである。destroy a picture は draw a picture に比べれば「普通でない」言いまわしであるにはちがいがない。動詞が「普通でない」ほど，その他の部分からの抜き出しが難しくなる，ということについて (10) の例を見よう。

10 a　What did you make the claim that John met ? [2]

　b　*What do you believe Mary's claim that John met ?

(10a, b) の許容度の違いは make the claim, believe Mary's claim しかない。make the claim は usual なつながりで，全体として非文をつくらないが，believe the claim が特別なつながりでないのに，believe Mary's claim の時に非文となるのは，明白につぎの例文を想起させる。

11. a　Who did you see pictures of ... ?

　b　Who did you see a picture of ... ?

　c　?Who did you see the picture of ... ?

　d　*Who did you see John's picture of ... ? (Erteschik-Shir and Lappin (1979: 72)

a > the > John's の順で許容度が低くなる。大庭（2002:202）の「特定性効果」(specificity effect）はまさしくこれである。しかし大庭（2002）にはこれ以上の説明はない。これらは特定的な要素をこえての WH の文頭への移動であるが，これに関連してつぎの例はこのことについて一つのヒントを与えてくれる。

12. a　I gave John a picture of himself.
　　b　?I gave John that picture of himself.
　　c　*I gave John Mary's picture of himself.
　　d　**I gave John Mary's sister's daughter's picture of himself. (Grosu 1972)

これらは特定的な名詞を越えての再帰化である。注目したいのは，(11)，(12）で示されるのは，(11）では a > the > John's の順で，特定的な要素は，文頭への WH 移動をさまたげ，また，(12）では，このような特定的な要素を越えての再帰化も許さないということを示している。(11)，(12）の例は間違いなくつぎの「指定主語条件」につながると思われる。

2. 「指定主語条件」の性質

まず，Chomsky（1973）の例と，これから引き出された「条件」を見よう。

13. a　The men saw the picture of each other.
　　b　*The men saw John's picture o each other.（下線筆者）

14.　Specified Subject Condition:
　　No rule can involve X, Y in the structure X, Y in the structure ... X「α .. Z ... WYV ...] ... where Z is the specified (i. e. non-personal) subject of WXY and α is a cyclic node (NP or S).

(13a, b）から導きだされたのが（14）の「指定主語条件」である。これは，指定的な「主語」をこえて，名詞どうしの関係づけはできない，というものである。しかし，これらの例文を見ると，「架橋動詞」と，「指定主語条件」の例文には共通な点があるように見える。それは，「特定性のつよい要素と，それ以外の要素の関係」についてである。つまり，

「架橋動詞」の例では，主節動詞の特定性と，その動詞以外の要素の WH 化移動の問題であるし，「指定主語条件」では特定的な主語と，ほかの要素の関係である。この二つの現象には「特定的な要素」という共通の理由が働いており，以下ではこのことをめぐって議論と検討をする。

これを確認するために，つぎの例をみよう。

15. a Who did you <u>see</u> a picture of ... ?
    b *Who did you <u>glimpse</u> the picture of ... ?
    c *Who did you <u>destroy</u> pictures of ... ?

ここでは，glimpse, destroy と see より意味が「特定的」で，'unusual' なつながりになるにつれて許容度が低くなっている。(3)

これらの一連の現象は，意味情報が豊かな箇所と，それ以外の箇所との関係に関わることがらのようである。情報がゆたかであることについてさらにつぎの例も見よう。

16. a ?Fred <u>really believes</u>/<u>believes right now</u> that Bess will certainly marry him, but it is not at all certain.
    b ?Fred believes [bili:vz] that Bess will certainly marry him, but it is not at all certain.

情報がゆたかであるには，情報がゆたかな語によるだけではない。(13a) のように，really, right now のような修飾語をつける，または (13b) のようにストレスをかけることによってもよい，ことをこれらの例は示している。(4)

3. 「架橋動詞」と「指定主語条件」の関連性

このようにみると，一つの構造の中で，意味的に「特定的」であるとか，「普通でない」つながりである，ということは，ことのほか「処理能力」を要することであることになる。

この観点からすると，およそ次のようにいえることになろう。

17. (1). 文には必ず，「意味的に優位」(semantic dominance) (Erteschik-Shir 1979) な箇所がある。
    (2). この部分は，文字どおり「優位」であり，「壁」になり，これを越えて要素

を移動することもできないし，この部分を越えて，要素どうし関係づけることもできない。

(3). さらにいえば，「指定主語」の「指定」にあたる specified は specific でも明白であるように段階的な形容詞であり，すでに見たように Chomsky（1973）は，'specified（i. e. non-personal）というが，specific は personal と non-personal と対になるような，二者対立の性質のものではない。[5]

さらに，上の 17（2）で，「越えて」としたが，次の例をみると，これには修正が必要である。つぎの例をみよう。

18. a　A man just left who was wearing a hat.
　　b　?The man just left who was wearing a hat.
　　c　??That man just left who was wearing a hat.
　　d　*John's brother just left who was wearing a hat.
　　e　**John's brother's son's daughter just left who was wearing a hat. (Grosu 1972)

ここでは，who 以下の関係節を文尾に移動し，この部分を主張にしている。問題は主語の限定している要素である。a > the > that > John's > John's brother's son's と限定的になるほど許容度がひくくなる。これは（10）で見た段階性とまったく同じ物である。ということは，上で見てきたように，prominent（優位）で限定的な部分を超えて要素を移動したり，関係づけたりはできない，のではなく，「限定的な部分がある場合には」要素を移動したり，再帰化などの関係付けはできない，ということになる。

1～5は，上でみてきた事実から明白であるが，このことから次のようにいえる。

(19)「架橋動詞」は，明白に「指定主語条件」に関連があり，これらは一つのことがら，つまり，その文の中でいちばん話者がいいたい情報ゆたかな部分と，それ以外の部分について，前提になっている部分には，あらたに手を加えることはできない，ということをそれぞれ述べたものである。

4. まとめ

以上みてきたように，「架橋動詞」，「指定主語条件」は，いずれも文中の「ある要素の意味の問題」であり，基本的には「意味の優位」な要素は，それ以外の要素の移動，関係づけをゆるさない，ということである。

一般論としては，「関連する他の言語事象にも必要とされるジェネラリゼーションがあるのではないか，ということを常に念頭において研究を進める必要がある」（久野・高見 2007：36）と思われるが，以上の検討から，つぎのように言えよう。

研究対象が個別的に孤立化されたかたちで扱われると，その対象の位置付けが見えにくく，そのもともとの研究対象のすがたも浮き立ってこない可能性がある。類例を丹念にみることを怠ってはならない。

注

(1) 既知の部分から，WH 前置ができないことは，つぎの例でも証明できる。

i. a My father promised a new car to me.
b My father promised me a new car.
c My father promised (me) to buy a new car.
d Who did my father promise a new car to ... ?
e What did my father promise (to do) ?

中島（1980：28）はつぎのようにいう。(ia, c) に対する疑問文（id, e）は可能であるが，「b, c にある me を引き出す疑問文を作れない。I. O. は既知のもので疑問文の主題にはならないからである。」（下線引用者）

(2) (5a) が許容されているのに，(5b) に "?" がつき，許容度が低くなっていているのは，idiolect によるものと判断されるので，ここではこれ以上立ち入らない。

(3) 'unusual' なつながりが，'usual' なつながりよりもはるかに多い処理能力を必要とすることの具体的な例については萩原（2007：101-102）を参照。

(4) i *Who did you lisp that John believes you saw ?

について，Deane（1992：37）は（ia）の非文性にかかわる主節動詞の lisp について，'a single word is more informative than the matrix phrase' といっているが，これは事実を誤解したものである。問題は，本文で見たように，主節動詞の情報量の問題で lisp = say with a lisp(COD) というように say よりも情報量が多くなっているが，これには，副詞がつくとか，ストレスをかけるとかの方法でも可能なのであって，一語であるかどうかは全く関係ない。

(5) ここにも，Chomsky によくある「二分法」の一端を見ることもできる。

参考文献

安藤貞雄・小野隆啓　1993『生成文法用語辞典』大修館書店

Chomsky, N. 1973 'Conditions on transformations' In S. P. Anderson and P. Kiparsky (eds) *A Festschrift for Morris Halle* Holt Rinehart and Winston

Chomskt, N. 1977 'On WH-movement' In P. W. Culicover et al. (eds.) *Formal Syntax* Academic press

Deane, P. 1991 'Limits to attention: A cognitive theory of island phenomena' *Cognitive Linguistics* 2: 1–63

Erteschik-Shir 1977 *On the Nature of Island Constraints* Ph. D. dissertation Indiana Univ. Linguistics Club

Erteschik-Shir, N. 1979 'More on extractability from quasi-NPs' *L. Inquiry* 12: 665–670

Erteschik-Shir and S. Lappin 1979 'Dominance and functional explanation of island phenomena' *Theoretical Linguistics* 6: 81–96

Grosu, A. 1972 'The strategic content of island constraints' In *Working Papers in Linguistics* Ohio State University

Gueron, J. 1980 'On the syntax and semantics of PP extraposition' *Linguistic Inquiry* 11: 639–678

萩原裕子　2007『脳にいどむ言語学』岩波書店

Huang, C. T. J. 1982 *Logical Relations on Chinese and the Theory of Grammar* MIT Press

久野　暲・高見健一　2007『英語の構文とその意味』開拓社

中島文雄　1980『英語の構造』（下）岩波書店

大庭幸男　2003「特定性効果とフエイズ不可侵条件」『市河賞 36 年の軌跡』開拓社　202–210

Postal, P. M. 1998 *Three Investigations of Extraction* MIT Press